

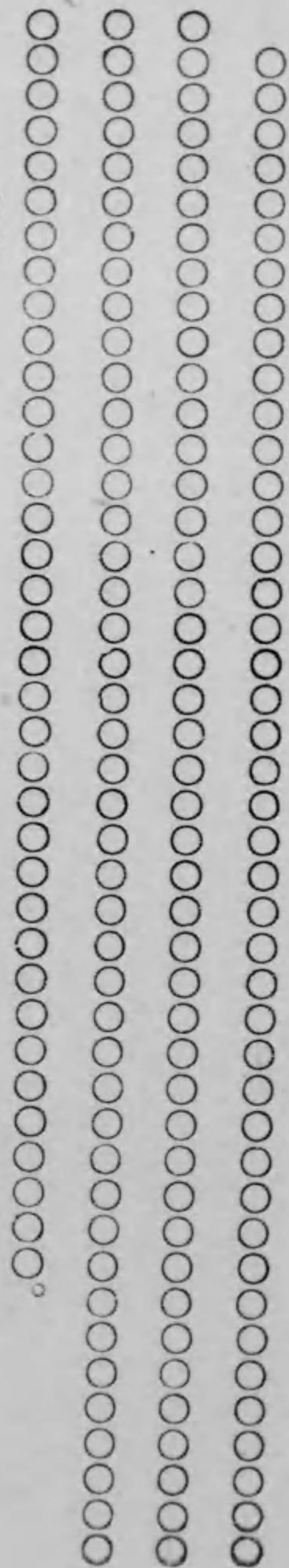
兵の弾丸に當つて仆れてゐた。彼は一八三〇年と一八四八年との二革命に参加した人である。それで今又この敗北を見てオメく生き延びるには忍びなかつたのである。

十二 『血みどろ週間』の最後

コンミュンの防禦がいよく弱くなると共に、敵の虐殺はいよく甚だしくなつた。右らゆる建物は捕虜で一バイになつてゐた。そして一たばねにして引張りだされては射殺された。時に依ると榴霰彈で一齊に仆され、半分生きながら埋められた。

廿六日の夕べから防禦はベルヴィールに集中した。廿七日は砲火の結果として、雨と霧との暗い日になつた。第十一區は既に廿五日の夜半に撤退したのだが、ドイツ兵はヴェルサイユの依頼に應じて、其の東北の退路を遮断した。敵の暴虐無残は時々刻々に報道された。醫者も看護婦も殺された。敵の約束で降伏した者も欺かれた。コンミュンの生き残つた労働者はたうとう堪りかねて、更

に人質の中、四十八人を射殺した。



廿八日の日曜、即ち『血みどろ週間』の最後の日、煙に包まれたシヨボく雨の中に、まだベルヴィールの一部分が持ちこたへてゐた。然し晝近くなつた頃、ベリ街にあつた最後のバリケードがとうく陥落してしまつた。そして其の最後の十五分間は、生残きつた只の一人が支へてゐた。而も其の一人が逃げのびたとは、驚くべき話である。其あとに残つた、いよく最後の壘は、ヴァンサンヌの外營只ひとつであつたが、そこでも翌廿九日に赤旗が取りおろされた。

之でいよくコンミュンが亡びた。無数の死骸は累々として焼け跡の煙の中に横たはつてゐた。

十一月七日

▲ロシアのボリシエキ革命は一九一七年（大正六年）十一月七日に成し遂げられた。私は今、その時の光景を『歴史講談』として書いて見る。『十一月七日』とは題したが、七日を中心として、その前後の事を書いて見る『歴史講談』だから、議論もなく、主張もない。只だ歴史上の事實を興味のある爲、研究の爲、ありの儘に書いて見る。つまり『パリ・コンミュン』を書いたのと同じ心持である。……

一

十一月七日（水曜日）全露ソヴィエツト第二回大會の第一日がペトログラードのスマルニー館に開かれる。ボリシエキは愈々その日を以て事を擧げる計畫を立てた。五日の夜、久しく姿を隠してゐたレーニンが初めて此スマルニーに現はれた。スマルニーはいよいよ革命の策源地として、有

らゆる原動力の集中點として確立した。

スマルニー館と云ふのは帝政時代に於いて皇后陛下から直接の保護を賜つた、有名な華族女學校で、それが今は労働者や兵士等の革命的諸團體の本據になつてゐた。横幅が二百間もあらうといふ宏壯な三階建て、其の正面の入口の上には、今でも大きな帝室の御紋章が儼然として、石に彫りつけられて残つてゐた。其の建物の傍らには、別にスマルニー修道院といふ尼寺があつた。其の温雅な、にぶ色の、圓い高い五つの塔が、艶消しの黄金に縁を取りられて、美しく空に輝いて聳えてゐた。館内には純白に塗つた大きな室が百以上もあつて、其のドアには『第三教室』『教員室』などと、エナメルできやしやに書いた昔の掛札が残つてゐるが、更に其の上の方には、荒つぽい太い字で新組織の澄澗たる元氣を示しつゝ、『ペトログラード・ソヴィエツト中央委員會』『全露ソヴィエツト中央委員會』『軍事革命委員會』『ボリシエキ部室』『社會革命黨部室』などいふ張札が掲げられてゐた。

一體、ペトログラードの市街は大きなネヴァ川に貫かれてゐるが、ケレンスキーの假政府の置かれてあつた『冬宮』は、其のネヴァ川を後ろに控へて、ちょうど市街の中央に在る。そしてそこからネヴスキーの大通りと、スヴォロウスキーの大通りとを経て、これもネヴァ川の上流を後ろに控へた、東の町はづれにスモルニーがある。ボリシエキキのスモルニーと、假政府の冬宮とが、約一里ばかりを隔て、東西相對峙してゐたわけである。

レーニンは七月の大示威運動の失敗でフィンランドに逃亡し、それから絶えず通信を發してボリシエキキの同志を激勵してゐたが、十月頃には窃かにペトログラードに忍びこみ、ネヴァ川の向ふ岸の郊外に潜伏して、いよく『總ての権力をソヴィエットに』奪取する畫策を回らしてゐた。十月廿三日の夜、同志カリニンの宅に開かれた秘密會には、ボリシエキキの主なる首領達と、ペトログラードの勞働者と兵士との代表者が、二十人ばかり集まつたが、レーニンは禿けた頭に鬘をかぶつてスツカリ變裝してやつて來た。

其の時には、まだ一舉の決行を躊躇する者が多くて、知識階級の首領の中では、レーニンとトロツキーの二人だけが斷乎たる決行論者であつた。軍人すらも反對してゐた。そこで決議の投票をやつて見ると、決行論者が負になつた。すると一人の荒くれた勞働者が憤然と立ちあがつて、顔中の筋肉を引きつらせながら叫んだ。『俺はペトログラードの勞働者の意見を吐く。俺達は此の一舉に賛成だ。君等は勝手にしろ。其の代り、若しこれでソヴィエットがこわされたら、俺達は君等を許しやしない！』或る軍人がそれに賛成した。そこで再投票をやると、今度は決行論者が多數になつた。けれども、ボリシエキキ中の右翼に屬する、リヤザノフ、カメネフ、ジノヴィエフ等は、猶ほ武裝一揆に反對する運動を續けてゐた。或る日、ジノヴィエフは軍事革命委員のアントノフに向つて斯う云つた。『若し少なくとも二週間、権力を保ち得るといふ證明が出来るなら、僕も君の武裝一揆説に賛成するのだが』と。

十月三十一日『ロバチ・フート』といふ、ボリシエキキの機關新聞に『同志に告ぐ』と題したレ

レーニンの續き物の論文が現はれた。それは實に古今未曾有の大膽な政論だと云はれてゐるもので、カメネフやリヤザノフの反對論を猛烈に駁撃した叛亂主張説であつた。曰く「之まで我々が「總ての權力をソヴィエットに與へよ」と主張した其の関の聲を放棄するか。さもなければ叛亂をやるか。中間の道は斷じてない。」それから決行説がいよく勝利を得て、五人の最高幹部が選ばれた。レーニン、トロツキー、スタリン、ジェルジンスキー、カメネフがそれであつた。そして彼等は屢々ヴィボルグといふ郊外の勞働者の家で會合してゐた。

十一月三日、更に重大な首領會議が同志スカロヴァの宅に開かれた。其の席上でレーニンは斯ういふ演説をした。「十一月六日は早すぎる。我々は此の一舉に對して全露的の基礎を持たねばならぬ。然るに、六日にはまだ、全露ソヴィエット大會の代議員が十分に來そろはない。」と云つて、十一月八日で遅すぎる。其の日にはモウ大會が成立してゐる。多人數の結合體が敏速な行動を取る事は困難である。我々は是非とも、大會の初めて開ける其の日、即ち七日に於いて事を舉げねばならぬ。」

そして我々は大會に向つて、「サア、ここに權力がある！ 諸君は之をどうする積りか」とヤルのだ。」

そして其の時、其の家の二階の一室では、髪が長い、顔の細い、瘦せた男が、ペトログラードを占領する、詳細な戰略地圖を作つてゐた。此の男は元ツァールの軍隊の士官で、後に革命家となつて追放されたアヴセーレンコ（通稱アントノフ）であつた。彼は數學者であり、又將棋の名人であつた。

之と同時に、一方には軍事革命委員會といふ重大な新權力が発生した。

それは最初レーニンの發案で、ボリシエキキの軍事部と左翼社會革命黨の軍事部と、ペトログラード・ソヴィエットの軍人部との代表者を集めて、政府の參謀部に附屬する、一委員會を作ると云ふのであつたが、それが更に一步を進めて、政府の參謀部と對立する革命的參謀部を作るといふ、ペトログラード・ソヴィエットの決議となり、十月廿九日、遂に軍事革命委員會として發表されたも

のである。勿論、政府側はそれに反対して、二つの参謀部を置く事は不合理だと論じ、或は之こそボリシエキキが政權を奪取する爲の参謀部だと攻撃したが、それに拘はらず軍事革命委員は其の日から權力を確立して、スモルニー館の一室に陣取つた。それと云ふのも、政府の参謀部が、ペトログラードの守備隊の中に革命的の兵士が非常に多くなつたのを怖がつて、今の守備隊を戦線に送り他の部隊を以てそれに代へるといふ考案を立て、ペトログラード・ソヴィエツトに其の承認を求めたけれども、ソヴィエツトがそれを承認しないで、参謀部に對する不信と不安を増大した結果であつた。そしてボリシエキキの策士等が、その氣勢を利用して、半ば意外にも革命的動力の重大なる中心を作り得たわけであつた。

斯くて軍事革命委員會はスモルニー館に陣取り、十一月三日には、政府の参謀部に七名の代表者を送り、同五日には、各兵營に専屬する委員を任命し、軍事革命委員會の副署のない参謀部の命令には、一切従はない事を約束した。参謀部は勿論それに反対したが、少しも反対の効果が無かつた。

然し左翼社會革命黨と、ボリシエキキの右翼たるリヤザノフ等の調停で、メンシエキキ派との間に妥協が成立し、軍事革命委員會は政權奪取の爲の機關でなく、只ペトログラードの兵士の利益を擁護し、及び反革命派に對して、ペトログラードの民主々義を擁護するものだといふ決議をしたけれども、實際上には、既に其の以前から、軍事革命委員會は七日の一舉に對する軍事的準備を整へ、全市を數區に分つて受持の委員を定め、漸次にソヴィエツトの獨裁を實行しかけてゐた。殊にペーテル・ボールの要塞は、冬宮の直ぐ後ろのネヴァ川の向ふ岸に在つて、ペトログラード占領の爲には第一の要害であり、又その兵器廠が重大な意義を有してゐるので、十一月四日の夜、軍事革命委員會の特利會議で、アントノフは一説を提出し、バヴロフスク聯隊から同志の數隊を連れて來て此の要塞を占領しようとする主張した。然し多數の意見は要塞内に集會を開いて要塞その者を説き落さうと云ふのであつた。それで其の翌日（即ち五日）要塞内に兵士の集會が開かれ、トロツキーとレシエヰイツツとが演説した結果、各隊一致で軍事革命委員會を擁護する決議を爲し、ペーテル・ボール要塞

は一戦を経ずして『我黨』の有に歸した。そして早速、ペトログラードの労働者に武器が配布された。而も要塞内に於ける法律上の軍事官憲は手の出し様がなく、デットそれを傍觀してゐる形であつた。

そこで政府も此の形勢に對して、それ／＼對抗の策は立てかけてゐるが、英國大使ブカナンが、首相ケレンスキーに向ひ、ボリシエキキが著々として軍事的準備を進めて居るのを知つてゐるかと思つた時、ケレンスキーは傲然として、假政府には如何なる叛亂をも鎮壓する實力があると答へた。又ペトログラードの司令官ボルニコフ大佐は、部下の軍隊に對して、叛徒に加擔してはならぬといふノンキな禁令を下して、濟ましてゐた。そして十一月五日の晝、政府の諸大臣は英國大使と共に食事をしながら、叛亂の噂話をして笑ひ興じてゐた。

所が一方スモルニー館では、軍事革命委員が中心となり、殊に其の中の特別委員たるアントノフ、ボトヴォイスキー、レシエヴィツツの三人が軍事計畫の首腦となり、それにペトログラード・ソヴ

イエットの會長たるトロツキーが、あの大きな目玉をむきだして頑張つて居り、五日の夜には、前に話した通り、遂にレーニンも乗込んで来るし、いよ／＼この昔の修道院女學校が、革命の策源地として、右ゆる原動力の集中點となり、それ／＼防禦の手順も整ひ、その嚴重な警戒ぶりは殆んど一個の要塞の觀を呈してゐた（メンシエキ派や右翼社會革命黨は其の頃にはもうスモルニーを立ちのいて、假議會の開かれてゐるマリイ宮殿に移つてゐた。）

或る日の事、トロツキーが細君と二人づれでスモルニー館の立關にやつて來ると、番兵がそれを遮ぎりとめた。トロツキーはポケットを探つたが、通行券が見つからなかつた。『好いちやないか。君、僕を知つてゐるだらう。僕はトロツキーだ。』名前なんぞ役に立たない。通行券のない者は斷じてれない。『番兵は頑固に拒絶した。』だつて僕はペトログラード・ソヴィエットの會長だよ。『フーン、それほどエライ人なら通行券の一枚ぐらゐ持つて居さうなものだ。』トロツキーはどこまでもおとなしく『では仕方がない、隊長に會はしてくれ』と頼んだ。番兵はそんな事で一々隊長を煩はすわけ

に行かぬとブツクサ云つて居たが、それでも結局、隊長を呼んできた。そこでトロツキーが隊長に譯を話して、『僕はトロツキーだ』と再び名乗をあげると『トロツキー？』と隊長は少し頭をかしげて、『其の名前はどこかで聞いたやうだ。ぢや宜しい。はいつて宜しい、タワリーシユ！』(此「タワリーシユ」は同志とか同僚とか云ふ意味で、誰に向つて、親愛の意を表する、革命以來の流行言葉であつた。)

今一つトロツキーについて面白い話がある。當時スモルニーでボリシエキキの首領達が如何に緊張して働いてゐたか、此の話でよく分る。六日の夜、トロツキーは一分間も電話を離れず、諸方面からの報告を聞いたり、諸方面に報告を發したり、不眠不休でやつて居たが、突然、顔の色が眞青になつて、深い息を一つ吸つたきりで床の上にバタリと倒れた。人々は驚いて、飛び寄つて抱き起したが、其の卒倒の原因は何んでもなかつた。トロツキーは九二日間、少しも食事なしなかつたのだ。する暇がなかつたのだ。

二

十一月四日は『ベトログラード・ソヴィエツト・デー』として、大示威運動が行はれた。これは元來、ベトログラード・ソヴィエツトの機關紙を作る爲に、其の費用を集める目的で計畫されたもので、二週間も前から十一月四日と極まつてゐたのだが、今となつて見ると、丁度それが一揆の直ぐ前に於ける、労働軍の閱兵式となつたわけだ。

四日には何か起る。ボリシエキキが何かやりだす。世間の取沙汰は只その事ばかりであつた。政府側の新聞紙などは殊さらそれを誇大にして、ボリシエキキが今にもベトログラードの全市を血の海にするかのやうに云ひふらした。所が、示威運動は只だ肅々として行はれ、到る處の町の辻や集合場で、ボリシエキキや、左翼社會革命黨や、無政府主義者の雄辯が數時間も繼續した。そして『ケレンスキー政府を倒せ！』『戦争を止めろ！』『總ての権力をソヴィエツトに與へよ！』斯ういふ

種々の合言葉が、雷流の如く全市の空氣中に漲りわたつた。右翼諸黨派の代表者で、一人として反對の聲を擧げ得る者がなかつた。

五日は（前に話した通り）スモルニー側では各兵團との聯絡を取り、着々として味方の勢力を増大してゐた。そして六日には既にペテログラードの占領計畫が完成してゐた。即ち其の大方針は味方の全勢力を三隊に分ち、一隊は、政府側の兵力が戦線からペテログラードに召集されるのを遮断する任務を帯び、一隊はスモルニーの防禦に充てられ、残る一隊は三方面から冬宮を半圓形に包圍し、そしてネヴァ川の水上からは、ペーテル・ポールの要塞と巡洋艦オーロラ及び水雷艇二隻とが冬宮に向つて砲撃すると云ふのであつた。

所が六日の朝、ボリシエキキの機關新聞たる『ラボチ・ブート』と『ソルダート』とが出なかつた。それは前日の夜、カデット（士官候補生）の一隊が襲來して印刷所を封鎖した爲で、假政府は六日の朝、右二新聞の禁止と、其の記者の捕縛とを布告した。然るに、スモルニーでは軍事革命委員が其

の報告に接して直ちに衛兵を派遣し、言論自由の爲に、其の禁止を解除し、政府の封印を破棄してしまつた。二新聞はそれで難なく發行され、印刷所は衛兵に護衛された。

同じく六日に今一つ難儀な事件が起つた。中央電話交換局の交換手共が、矢張りカデットの指囃を受けて、ソヴィエツトに反對して電話の接續を拒絶した。これが政府の官吏や使用人のやつた第一のサボタージュであつた。そこで軍事革命委員は直ちに又、一隊の兵を交換局に送り、其の門前に二個の小砲を据ゑつけた。

それから諸官衙の占領が始まり、水兵や赤衛軍の小隊が諸方面に分遣されて、停車場も、電信局も、電氣局も、電話局も悉く占領され、更に最も肝腎な中央國立銀行も占領された。

政府は之に對し、軍事革命委員の解職、ボリシエキキ首領の捕縛等を布告したが、今となつてそれは何の効果もなかつた。其の夜、ケレンスキーは假議會に臨んで一場の演説を試み、盛んにボリシエキキの暴狀を攻撃し、此の危急の際に於ける斷乎たる鎮壓政策の要求を、殆んど泣かんばかり

に力説したが、各黨派とも躊躇逡巡の有様で、立憲民主黨が右翼社會革命黨を突ツつて賛成を求むれば、右翼社會革命黨は中央黨たるメンシエキキに凭れかゝるが、凭れかゝられたメンシエキキは左翼社會革命黨に遠慮して何事も決することが出来ない。そこで結局、左翼社會革命黨の決議が通過したが、それは、ソヴェエツトの亂暴な行動を非難すると同時に、然し其の原因は政府の反デモクラチツクな政策に在ると云ふのであつた。そこでケレンスキーは、左翼の首領アヴクセンチエフを冬宮に招いて、若し此の決議が現内閣に對する不信任を意味するならば、自分に代つて新内閣を組織してくれと要求したが、アヴクセンチエフにはそれだけの勇氣がなかつた。要するに政府と假議會とは、只だ躊躇と逡巡と不決斷と狼狽とを以て此の危急に處してゐた。(ポリシエキキは、此の時にはモウ假議會を無視して一人も出席しなかつた。)

然し政府は防戦の準備をした。コサツク兵は少數の部隊の外、ケレンスキーの命に應ぜず、肝腎の頼みの綱のセメノフ聯隊も躊躇の形であつたが、それでも冬宮には、カデツトの數隊と、女子決

死隊とが立てこもり、ミカエル砲兵學校から運んで來た四門の大砲が据ゑつけられ、外に武装自動車の数個が置かれてあつた。これが六日の夜までの形勢であつた。(カデツトは士官學校の生徒だから、勿論貴族及び上流階級の青年であり、女子決死隊も同じく上流階級の愛國婦人から組織されたものであつた。)

斯ういふ形勢の間に、文豪ゴルキーは、其の機關新聞『新生命』の紙上で、露國の文化生活が全く破壊されると嘆き、曾て自分の作つた有名な革命詩『鷹の歌』の事は全く忘れて、頻りに世の末を悲しんでゐた。(此の一節は、トロツキーの皮肉な罵倒を借用した。)

三

十一月七日(水曜日)はいよいよケレンスキー假政府の倒れた日だ。

一體、革命などと云へば、全社會がどんな混亂状態に陥つてゐる事だらうと、誰でも先づ想像す

るが、實は存外、平靜なものである。三月の革命以後、ペトログラードでは、總ての劇場が毎晩續いて開演されてゐた。マリンスキー劇場に於ける女優カルサヴィナの新舞踊などは、相變らず評判になつてゐた。女流のインテリゲンチヤは、文學、美術、及び通俗哲學の講演に群れ集まり、救世軍は此の國への新輸入の事として頻りに其の福音的の説教を珍しがられてゐた。詩人は詩を作るが、革命の事は知らん顔をしてゐる。畫家は超然として、中世の歴史畫ばかりをかいてゐる。田舎の若い貴婦人は依然としてフランス語の稽古に上京して來る、といふ有様であつた。勿論、カフェーで賭博をやつてゐる連中もあり、夜の街をさまよひあるく寶石澤山の淫賣婦もあつた。

それで此の十一月七日にも、ネヴスキーの大通りには矢張り平生の通り電車が走つてゐた。店々も平生の通り開いてゐた。昨日に比べると、町の様子は寧ろ不安の氣が少なく見えた。そして何程の騒動も混雜もなく、市民の多數の知らぬ間に、ケレスキー政府は倒れてしまつた。トロツキーは其の日の事を斯う書いてゐる。『スモルニー館の三階の小さな一室から發せられる緻密な電話の訓令に

従つて、

.....

カメネフの談話録には、同じ日の事が斯う書いてある。『ソヴィエツト大會の開かれる其の日、我の兵隊とケレンスキーの擁護者との間に、幾多の衝突が街上に起された。然し我々に取つては、ペトログラードの労働者が味方であるばかりでなく、ペトログラードの守備兵の全部が同じく味方である事が、絶対に明白であつた。又、既に到着してゐる全國ソヴィエツト代表者の大多數が同じく我々の味方である事が、同じ程度に於いて明白であつた。そこで我々としては、早く此の新權力の實際的組織を作り始める事が必要になつた。

『スモルニーの三階では、スヴェルドロフ、ウリツキー、ヨツフエ、ジェルジンスキー等の軍事革命委員が、市内に於ける有らゆる要處を占領すべく、指揮命令を發して居り、アントノフ、ボドヴオイスキー、チュドノウスキー等は、それらの持場から冬宮の攻撃を準備してゐる時、スモルニ

一の二階の第三十六號室では、レーニンを議長として人民委員(分り易く云へば、新政府の内閣員)の役割を定めてゐた。此の新權力を『勞農政府』と呼ぶ事にしたのは、レーニンの發案であつた。土地の處分と、講和とに關する法令案も、レーニンが自ら書いた。從來の大臣といふ名稱を廢して「人民委員」といふ名稱を用ひる事もこゝで極まつた。

『それから同じく此の會議で、左翼社會革命黨との提携の計畫が行はれた。同黨は其の代表者として、カムコフ、カリエリン、コレガエフ(だつたと思ふ)の三人を我々の處に送つて、之からどうする積りかと我々に質問した。我々は彼等に答へた。我々としては、問題は既に解決されてゐる。我々は權力をソヴィエツト大會に移す。そして我が黨員を以て政府を組織する。けれども、若し彼等が全然我々に與するならば、政府の椅子の幾つかを彼等に與へる積りであると。然るに彼等は、黨の分裂を來す恐れがあると云つて、我々の申出を拒絶した。

『此の會議を終つて、我々は大會を開いた。大會では私が(カメネフが)議長になつた。大會は恰

度、冬宮攻撃の最中に開かれた。右翼社會革命黨とメンシエキ派との、退場の宣言を読みあけるのに數分間を費した後、レーニンが壇上に登つて、土地と講和とに關する法令を読みあげた。……

……。

そこで今度は冬宮攻撃の方面がどんな工合に進行したか、それを少し聞いて見たい。それにはボドヴォイスキーの談話がある。『午後三時、總ての首領がスモルニーに集まつた。自分と、アントノフと、チュドノウスキーと、エレメエフとは、大急ぎの會議を開いて軍事上の形勢を測定した。諸種の報告に依れば、政府はベトログラード附近に少しの援兵をも持つてゐなかつた。戦線の部隊は政府の招きに應じなかつた。

『日は段々暗くなりかけた。兵士等は寒さと飢とが増して來るので、攻撃開始の遅延に對して、ブツブツ不平を云ひだした。首領等はスモルニーから直ぐ、冬宮の包圍に取りかゝつた。冬宮の區域

は間もなく包圍されて、總ての出入口が閉鎖された。六時になつて、我々は電話を冬宮に掛け、假政府を呼びだして降伏を勸告した。然し政府はそれを拒絶した。そこでペーテル・ボールの要塞と巡洋艦オーロラとが、發砲開始の準備をした。

『其の指揮をする爲に、アントノフはオーロラに行き、自分はペーテル・ボールに行つた。夜の八時になつて、チユドノウスキーは辯士數人と共に、使者として冬宮に送られた。』

『チユドノウスキーは政府員に對して、軍事革命委員會に降伏すべき事を勸告した。すると、總督代理バルチンスキーは、それには答へないで、自分の兵隊に向つて演説した。明朝まで我慢せよ、さうすれば戦線から援兵が到着すると。兵隊は少し躊躇しだした。そこでバルチンスキーは勢ひを得て、辯士等を抑留せよと命令し、更に彼等を射殺せよとさへ威嚇した。』

『けれども、チユドノウスキーの短かい演説で、此の上の抵抗が無益だと云ふ事が、直ぐに兵士等に分つて來た。それでも一部分の兵隊は猶ほ防戦を主張して政府員を喜ばせたが、他の一部分は早

くも降伏しはじめた。婦人決死隊も自ら武装を解きすてた。

『政府側に残つたのは殆んどカデットばかりで、其の一部は冬宮の門に近いバリケード(築塞)に陣取り、他の一部は地下室に籠つて飽くまで冬宮を守らうとした。』

『其の時、政府の砲兵隊が我が軍を砲撃すべく進出したが、モルスカヤの我が伏兵がそれを攻撃して大砲二門を奪取したので、彼等は直ぐに再び冬宮に追ひこめられてしまつた。これが他の防衛隊の上に決定的の影響を及ぼした。』

『我々は、使者が戻つて來ないので、いよいよ冬宮の包圍を進める命令を下した。……我々が第二陸戦隊のバラックに達した時、二人の將官が引張られて來た。エレメーフが其の顔を知つてゐた。』

一人はペトログラードの司令官バグラチ、今一人は軍務次官ツマノフ公であつた。水兵はそれを撃ちたがつたが、我々が強ひて押しとめて要塞に送つた。後で聞けば、ツマノフ公は矢張り街上で誰かに殺された。

それから多少の抵抗があつて、冬宮内から機關砲を發射したりしたので、こちらも直ぐにペーテル・ボールの司令官ブラゴンラヴォフに命令して、いよく發砲を開始した。『其の砲撃が響きわたり、彈丸が冬宮の上にバラ／＼と落ちはじめると、彼等の最後の躊躇がやんだ。カデット等はバリケードの後ろから飛びだして「降伏、降伏」と呼びだした。我が諸隊は大群を成して冬宮内に進入した。……………ケレンスキーだけは逃走してゐた。我が兵士の或者は彼等に暴行を加へようとしたが、労働者等は私刑に反對した。政府員は兵士に圍まれてペーテル・ボールに護送された。宮中の貴重品を我先に奪はうとする兵士等もあつたが、赤衛隊が斷乎としてそれを禁止した。』

更にアントノフの話を少し聞いて見る。冬宮包圍の諸隊は七日の正午頃に出て來る豫定であり、クロンスタットの水兵一千人は午後の二時ごろ到着の豫定であつた。彼は十一時ごろペーテル・ボール要塞に行き、冬宮を砲撃する手順について司令官ブラゴンラヴォフと打合せをした。彼は又そ

こで、假政府に降伏を勧告する軍事革命委員會の最後通牒を立案した。それに對する考慮期間は二十分で、それが過ぎたら直ぐにオーロラと要塞とから發砲する手順であつた。それから彼はオーロラに行つて發砲開始についての信號の打合せをした。

然るにクロンスタットの水兵は夜の七時になつてヤット到着し、九時になつて初めて要塞とオーロラから砲撃が始まつた。彼はチュドノウスキーと共に諸隊を率ゐて冬宮に進入し、先づ總督バルチンスキーを生捕り、次に十六人の大臣を捕縛した。ケレンスキーは午前の十一時に逃走したのであつた。

要するに冬宮攻撃は意外にも雜作なく片づいた。之についてトロツキーは云つてゐる。『十一月の時に、非常に用心深い態度を取り、即時決行説に對して或る懷疑をさへ持つたのは、實に我黨の軍事部の人々であつた。彼等は其の専門的の立場からして、一擧の純器械的方面を過大視したのであつた。其の方面に於いては、實際我々は貧弱であつた。……………彼等が

直ちに起つて我黨の旗幟の下に戦ふ其の精神に在つた。『レーニン等も矢張り其の……』
に信頼しきつてゐた。だから（前のカメネフの談話にある通り）彼等は冬宮の攻撃を餘所にして、
落ちつきはらつて新政府の組織を研究してゐたのであつた。つまり此の革命は、軍事方面に於いて
は讀んでゐても張合のないほど詰らないものだつた。然し其の詰らないだけ犠牲が少なくて濟んだ
のだ。其の夜、ベトログラード・ソヴェエツトの臨時大會に於ける決議文の劈頭には斯う書いてある。

『……』

四

アメリカの新聞記者として有名なジョン・リードは、『世界を震撼した十日間』と題して、此の革

命の印象記を書いてゐる。前の話にも其の中から借用した所が澤山ある。こゝには又その中から、
七日の光景をあちこち摘録する。

十一月七日、水曜日、私は非常に晩く起きた。ネヴスキーの大通を降つてゐると、正午のドンが
ペーテル・ポールから響いて來た。随分寒い日であつた。中央國立銀行の前まで來ると、數人の兵
士が銃に劍をつけて、閉めきつた門の前に立つてゐた。

『君達はどちら側に屬してゐるのか。政府側か？』と私は聞いた。

『モウ政府なんてありやしない。神は讃むべきかな！』と一人の兵士が笑みを含んで答へた。

× × × × × × × × × ×

冬宮の門前に兵士と水夫の一群がゐた。一人の水夫は假議會の終末の話をしてゐた。『俺達はあそ
こに（假議會の會場マリー宮殿に）はいつて行つた。そして總てのドアに我々が張番した。俺は

議長の席に坐つてゐた反革命の野郎の處に押しかけて行つた。そして云つてやつた。オイもう議會は無くなつたよ。サア早く歸れ歸れ。」

(假議會は其の時もまだ左右兩派に別れて、あちこちの砲撃を聞きながら討論を續けてゐた。議長の席には左翼社會革命黨員アヅクセンチエフが坐つてゐた。そして實際、其の時にはモウ議會は無くなつてゐたのであつた。)

×

×

×

×

×

×

ケレンスキーの部屋の前に、一人の若い士官が鬚を噛みながら行つたり來たりしてゐた。我々は總理大臣に會見を求めた。士官は立ちどまつてフランス語で答へた。「アレキサンデル・フェドロキツチ(ケレンスキーの名)は今非常に御多忙です。……」彼は暫らく我々の顔を見つめてゐたが、「實は居ないので。」

「何處に居るのです。」

「戦線に行つたのです。所がね、自動車のガソリンが足りないで、實は英吉利病院で少しばかり借りて來たのです。」

「外の大臣達は？」

「どこかの部屋に集まつてゐるでせう。僕は知らない。」

「ボリシエキキはやつて來るんですか。」

「勿論、來る。今にも電話が掛かるかと待つてゐる所です。……」

×

×

×

×

×

×

先を争ふ人波に浚はれて、我々は(冬宮の)右手の入口から大きな、廣い、天井の高い一室に押しこまれた。そこには大きな箱が幾つも轉がつてゐて、赤衛隊や兵士等が烈しい勢ひでそれに襲ひかかり、鐵砲の臺尻で其の蓋を叩きこわし、敷物だの、窓掛だの、陶器だの、硝子器だの、種々雑多な物を引きすりだした。或者は青銅製の鷄を自分の肩に乗せて歩いてゐた。或者は駝鳥の羽を取つ

て自分の帽子にさしてゐた。斯様にして掠奪が始まりかけた所に、『タワリーシユ！同志よ！。この物を取つてはいけない！之は人民の財産だ！』といふ誰かの叫び聲が聞えた。續いて幾つも幾つもの聲が叫んだ。『返せ、返せ！』『一物も取るな！』『人民の財産だ！人民の財産だ！』。それから直ぐに總ての箱が元の通りに形づけられて、自選の番兵が其の側に突つ立つた。之は全く自然的の行動であつた。『革命の紀律！』『人民の財産！』などいふ聲が猶ほ暫らく廊下や梯子段から聞えてゐた。

我々は左の入口の方に廻つて行つた。そこでも今、秩序が立てられつゝあつた。『サア皆な出た出た』と、一人の赤衛兵が内側の戸を覗きこんで云つた。『タワリーシユ！（同志よ！）我々が泥棒や追剥でない事を示してやらうぢやないか。サア、番兵の出来るまで、コミサール（委員）の外は皆な出た〜。』

二人の赤衛兵（一人は士官、一人は兵卒）が、手にピストルを持つて立つてゐた。今一人の兵士

は其の後ろにテーブルを控へて、ペンと紙を持つて腰かけてゐた。『皆な出た〜』といふ叫びが、遠く或は近く、奥の方から聞えて、兵隊が押しあひへしあひ戸の中から出はじめた。自選の検査委員は其の一人つゝを捕へて、ポケットや上着の内側を搜索した。本人の所有品でないと認められた物は皆な取りあけて、テーブルの兵士がそれを紙に書きつけた。取りあけた品は次の小さな室に運ばれた。斯様にして、小石像、インキ壺、皇室の組合せ文字の刺繡された寢床掛、燭臺、小さい油燈、吸取器、金の柄のついた劍、石鹼、色々の着物、ブランケットなど、種々様々の品物が没収された。或る赤衛兵は三挺の銃を持つてゐたが、其の二つはユンケル（士官候補生）から奪つたのであつた。今一人は書類の一杯はいつた折カバンを四つかゝえてゐた。犯人等は怨めしさうに品物を差出すか或は子供のやうにそれをネダつてゐた。検査委員は忽ち言葉を發して、一體、物を盗むなどいふ事は、人民のチャンピオンたる者にふさはしからぬ事だと説明した。すると今取りあけられた連中が、今度は直ぐに向き直つて、跡から来る連中の搜索をやつたりしてゐた。

略の圖案や宣言の文案などが書きつけられてあつた。それらの多くは、其の無効が立證されたので皆な滅茶々に消されてあつた。そして残りの紙には、色々の幾何學的構圖が無駄書きされてあつた。思ふに、其の筆者等は他の諸大臣が次から次へと夢のやうな計畫を提案する時、意氣沮喪してそれを聞いてゐたのであらう。私は其の一枚を取りあけて見ると、それはコノヴァロフの筆跡で、『假政府は、總ての階級に訴へて此の假政府を支持せんことを……』と書いてあつた。

x

x

x

x

x

x

然るに此の時、冬宮は包圍されて居たけれども、政府は猶ほ絶えず戦線及び地方と通信を保つてゐた事を我々は記憶すべきである。ボリシエキキはその朝早く、軍事省を占領したけれども、その屋根裏に軍事電信のある事を知らず、又それと冬宮とを聯結してゐる秘密電話線のある事を知らなかつた。所が、その屋根裏に、一人の若い士官が終日残つてゐて、政府の發する種々の訴文や宣言を全国各地に向つて續々と發電してゐた。そしていよいよ冬宮が陥つたと聞くと、彼は帽子をか

ぶつて悠々と其の建物から出て行つた。

五

今度は七日の夜に於ける、全露ソヴィエツト大會の様子を少し委しく聞いて見る。同じくジョンリードの本からあちこち抄録する。たまにはトロツキーの『ロシア革命の歴史』からも借用する。ワイ／＼云つて居る群集を押しわけて大集會場の中にはひると、白い枝型の電燈が天井や兩側の壁や演壇の隅などに輝いてゐる其の下に、ロシア全國の勞働者と兵士の代表者が、翹望の沈黙、或は狂亂の歡喜の中に、議長のベルの鳴るのを待つてゐた。室内には暖爐もスチームもないが汚れた人間の體の熱が蒸々してゐた。煙草の煙がきたない雲のやうに群集の間から舞ひ上つて、鬱積した空氣の中にたゞよつてゐた。折々、世話役の人が演壇に登つて、同志諸君に煙草を吸はないやうに頼む。すると皆が、吸つてゐる人も吸はない人も、『タワリーシユ！ 禁煙々々』と呼びながら、それ

で矢張り盛んに吸つてゐた。オプロフェ工場の代議員で無政府主義者のベトロウイスキーが、自分のそばへ私の席を拵へてくれた。彼は鬚だらけ、垢だらけで、軍事革命委員会に於ける三日三晩の働きつゞけの爲、フラ／＼するほど疲れてゐた。

ブラットフォーム（演壇）には、元の『ツエー・エー・カー』（中央執行委員）の諸首領が着席してゐた。……其中、最大の三人物は居なかつた。即ちケレンスキーは人目を忍んで戦線に走つてゐた。チュヘーゼは鬱々として故郷のジョージャの山中に其の肺病を養つてゐた。そしてツエレリは、これも致命的の打撃を痛感しながら、それでも今一度引返して其の雄辯を試みる元氣は持つてゐた。ゴツツ、ダン、リーベル、ボグダノフ、プロイド、フィリボウスキー、それらは皆な血の氣のない顔に、憤怒の氣を示してゐた。

時は十時四十分であつた。おとなしい顔の、禿け頭のダン（メンシエキキの首領）が、クチャクチャになつた軍醫の制服を着て、議長のベルを鳴らしてゐた。

『我々は今、我々の手の中に權力を握つてゐる。……多言する必要はない。自分は中央執行委員の一人である。……自分の同僚は今、冬宮に於いて砲撃を蒙りつゝ、我々の彼等に附與した其の任務を果してゐる。……（喧囂怒罵）』

『こゝに全露勞農ソヴィエツト第二大會の第一日を宣言する。』
それから大會委員の選舉があつた。ポリシエキキと左翼社會革命黨とインタナシヨナリスト（ゴルキイ一派）との協定で、ポリシエキキ十四人、社會革命黨七人、メンシエキキ三人、インタナシヨナリスト一人といふ比例が立てられた。所が、社會革命黨の右翼と中央派は参加を拒絶し、メンシエキキも同じく拒絶し、インタナシヨナリストも躊躇した。次いで怒罵と混亂との間に、舊ツエー・エー・カーは壇を下り、それに代つて、トロツキー、カメネフ、ルナチャルスキー、マダム・コロンタイ、ノギン其他が壇上に登つた。満堂が破れるばかりにどよめいた。そしてカメネフが議長席に着いた。

間もなく冬宮附近の銃聲が聞えた。ペーテル・ボールからの砲聲もドシン、ドシンと響いて来た。群集は氣遣はしげに皆な窓の方を見やつた。一種の興奮が満場を襲つた。メンシエキ左翼のマルトフは憤然として壇に登つた。「諸君、内亂は既に始まつてゐる。此の危急を平和に解決するの目下第一の急務である。」彼は、此の大會の會前に於いて、一派の者が暴動に依つて權力を占めようとしてゐる事を極力非難し、此の際、全デモクラシーの承認する新權力を樹立する爲、社會主義の諸黨派諸團體に對して交渉すべく、大會の代表者を選擧しようとして提案した。

大尉の肩章をつけたカラシユ、長い鳶色の山羊服を着た士官のキンチュクなどは、軍隊の代表として盛んにポリシエキ派に對する攻撃を向けた。そして結局、キンチュクは、今日に於ける平和の解決の唯一の道は、假政府と談判して新内閣を作るに在ると主張し、メンシエキ派の宣言を高声に朗讀した。

彼れの降壇と引きちがひに、一人の若い兵卒が目から焔を燃やしながら演壇に飛びあがつた。「メ

ワリーシユ！ 俺の名はペーテルソンと云ふ。諸君は今、二人の軍隊代表者の意見を聞いた。然し奴等は兵卒の代表ではない。』ペーテルソンは、拳骨を振りちらしながら更に云つた。「俺達は疾づくにから皆んなサウ云つてゐる。決議なんぞ入らない。議論なんぞ入らない。只だ實行あるのみだ。……」

……あの贗物の軍隊代表を此の大會から追ひ出してしまへ！』

群集は歡呼した。之が本當の兵隊の聲だ。先程から稍や不安を抱き、躊躇を感じてゐた群集は、此の兵卒の目の光りに眞實を看取した。

次いでユデヤ社會民主黨(謂ゆるブンド派)のアブラモソチが立つた。彼は憤怒に震へながら語つた。「今ペトログラードに起つてゐる此の有様は、實に驚くべき大危難である。我々は此の罪惡の責任を負はない。ペトログラードの市會は今、メンシエキと、社會革命黨と、農民ソヴィエツトの執行委員と共に、假政府の爲に死ぬる事を決定した。我々は彼等に與する。我々は此の暴力派の機關銃の前に、我々の此の胸を曝らしてやる。」

斯くて大喧囂、大混亂の間に、五十名の代議員が退席した。議長カメネフはベルを鳴らして叫んだ。『靜かに、靜かに。我々は議事を進める。』

すると、今度はトロツキーが、青ざめた酷薄な顔で立ちあがり、冷かな輕侮を浴せて斯う云つた。『彼等、謂ゆる妥協的社會主義者、彼等メンシエキキ、社會革命黨、ブンド派。恐怖した彼等をして去らしめよ。彼等は歴史のゴミ溜に放りこまるべきゴミに過ぎない。』(リード)

X X X X X X X X X X

冬宮の占領が暇どるので、大會中の稍や弱い分子は幾分不安を起してゐた。右翼の連中は頻りに我々の失敗を豫言してゐた。總てが冬宮の消息を待ちあこがれてゐた。

暫くすると、冬宮攻撃の指揮者たるアントノフがやつて來た。忽ちにして満場が死の如く沈黙した。冬宮は占領された。ケレンスキーは脱走した。他の諸大臣は捕縛されてペーテル・ポールに送られた。十一月革命の第一章が終りを告げた。

右翼社會革命黨及びメンシエキキの約六十名、即ち大會の約十分の一が抗議を提出して退場した。彼等は何事をも爲し得ないので、只だ全責任をボリシエキキと、左翼社會革命黨とに投げかけた。(トロツキー)

X X X X X X X X X X

我々が(二度目に)大會の會場にはひつた時、カメネフは捕縛した諸大臣の名を読みあけてゐた。テレスチエンコの名は雷の如き喝采と、満足の叫びと、大笑ひとで迎へられた。ルーテンベルグもそれに負けぬ歓迎を受けた。次に總督バルチンスキーの名が出ると、大叫喚と、怒罵と喝采とが一時に爆發した。

すると突然、鬚むちやの大きな百姓男が演壇に飛びだして、幹部のテーブルに向つて拳こつを突出しなが、怒鳴り立てた。彼は社會革命黨として、冬宮で捕縛された社會主義諸大臣の釋放を要求するの聲めつた。

トロッキーは手を振つて場内の混雑を制しながら云つた。「ケレンスキーを助けてソヴィエットの破壊を企てた彼等に對して、何を假借する理由があるか。七月以後、彼等は我々に對して餘り遠慮はしなかつたではないか。」トロッキーは更に得意の聲音を高めて云つた。「臆病な妥協者は既に去つた。……………此の際、特に必要なものは、只だ活動である。活動である。我々は負けるよりは寧ろ死ぬる事を選ぶ！」

マルトフ派の(左翼社會革命黨)カペリンスキーは、更に「内亂に對する平和の解決を見出だすべき、特別委員の選舉」を提案した。「平和の解決といふものがあるか！」戦争の勝利が唯一の解決だ！」提案は大多数で否決された。マルトフ派も遂に嘲笑の罵聲を浴びながら退席した。

大會は總ての退席者を無視して、「労働者、兵士、及び農民に訴ふ」の決議文を通過させた。

午前五時十七分、クリレンコは連日の疲勞にヨロつきながら演壇に上り、一通の電報を読みあげた。「タワリーシユー 北部戦線より。第十一師團はソヴィエット大會を歓迎し、軍事革命委員の設

立と、及びそれが北部戦線の指揮權を握つた事とを報告する。」忽ちにして歡喜の大混亂が場内に生じた。相抱いて泣く者もあつた。

六

七日の夜、ネヴスキーの大通りで面白い一つの光景があつた。丁度エカテリアナ運河の角の處で、四列になつて進行して來る一群の人々を、一隊の水兵が遮りとめてゐた。群集は約三四百人で、フロツクコートを着た人、美裝した婦人、陸軍士官など、様々の種類から成立つてゐた。其の中にはソヴィエット大會を退席した代議員(メンシエキキ及び社會革命黨の首領達)も澤山ゐた。髯の赤い瘦せた男のアヴクセンチエフ、ケレンスキーの代辯者たるサロキン、それからキンチュク、アブラモキチなどの顔も見えた。最先にはベトログラードの市長なる白髯のシユライデルと、假政府の糧食大臣(その朝一度捕へられて、後ち釋放された)プロコボキツチとが立つてゐた。

彼等は『冬宮に死に行く』と叫んでゐた。水兵は『一人たりとも冬宮には断じて入れない』と頑張つた。『然らば其の鐵砲で我々の此の胸を撃て！』水兵もさすがに躊躇した。『撃てないなら通せ！。サア通せ！。サア通せ！。』ヨシ、強ひて通ると云ふなら射殺する。サアもう歸つて呉れ、歸つて呉れ。』

群集は憤慨した。怒號した。プロコボキツチは道ばたの箱の上に飛びあがつて、蝙蝠傘を振りながら演説した。『彼等は暴力を揮つてゐる！我々は此の無智な人々の手に、我々の無辜の血を流すに忍びない。我々は寧ろ市會に歸つて、此の革命を救済する最善の方法を講じよう。』

群集は又四列になつて、沈黙の中にネヴスキーを登り、市會に歸つて行つた。市會はそれからボリシエキキ反對の策源地となつた。

八日の朝、市街電車は矢張り運轉してゐた。商店も開かれてゐた。レストランも開かれてゐた。劇場も常の通りであつた。繪畫展覽會の廣告さへあつた。

然し市中一般、ケレンスキーが今にも大軍を率ゐて押寄せて來るといふ噂で持切りであつた。新聞紙と張紙とは、ボリシエキキと反ボリシエキキと、兩方面からの盛んな宣傳に充ちてゐた。

午後、宏大なニコライ會堂に市會が開かれた。髪も髯も眞白い老市長シユライデルが、莊嚴な態度で演説した。『ヂユマ(市會)は今、ベトログラードに於ける唯一現存の合法的政府である。我々は暴力の政府を承認しない。』すると、ボリシエキキの議員等は『我々はこんな反革命の巢に止まる事を拒絶する。我々は市會の再選を要求する』と叫んで退場した。場内からは『獨逸の手先！』『反逆者を倒せ！』といふ罵聲が退場者の上に浴びせられた。

別にアレキサンデル館では『革命救済委員』の會合が開かれ、前社會主義大臣スコペレフが演説してゐた。『ロシア國家の存在が今日ほど脅かされた事は未だ曾て無い。』『我々は此の地歩を譲るよりは寧ろ死を選ぶものである！』そして鐵道従業員、郵便電信従業員等が皆それに加擔した。『ボリシエキキが我々インテリゲンチヤ(智識階級)を指揮しようとする。今に見ろ！』と、彼等は憤慨

した。つまり政府の役人等は悉くサボタージュをやるのであつた。

此の會合と、ソヴィエツト大會とは、實に顯著なコントラストを成してゐた。あちらでは、貧相な兵卒、薄汚ない労働者、百姓、貧乏人、總て慘憺たる生存競争の傷痕を持つた人間ばかり。こちらでは、アヴクセンチエフ、ダン、リーベルなどのメンシエキ及び社會革命黨首領、スコベレフ、チエルノフなどの前社會主義大臣、それにカデツトや、新聞記者や、學生や、有らゆる種類の智識階級、つまり總てが善食善衣の人で、プロレタリアは三人以上見つからなかつた。

X X X X X X X X X X

ソヴィエツト大會の第二日は午後一時に開かれる筈であつた。會場はもう疾くから一杯になつてゐた。それで七時になつてまだ委員が着席しなかつた。ボリシエキキと左翼社會革命黨とは、各自の部屋で會議を開いてゐた。其の日の晝から中、レーニンとトロツキーは妥協に對する戰闘をやりつゝけてゐた。ボリシエキキの中でも、社會主義の聯合政府を作る事に讓歩しかけた者が、可

なりの多數になつてゐた。『逆もこれでは遣りきれない。』『餘り敵が多過ぎる。』『我々は今に孤立に陥つて萬事休する事になる。』カメネフ、リヤザノフ等の説がそれであつた。

然るにレーニンは、傍らにトロツキーを控へて、岩の如く確立してゐた。『妥協者をして我々のプロダラムを承認せしめよ。さうすれば仲間に入れてやる。我々の方では一インチも讓歩しない。若し我が同志の中、我々の敢てする所を敢てするだけの勇氣と意志とを缺く者があるならば、それは飽くまでも病者及び和解好と共に離れ去るべきである。労働者と兵士とに擁護される以上、我々宜しく他の億前進すべきである。』

X X X X X X X X X X

私は或るアナキストの新聞記者に誘はれて、暫らく館内を歩きまはつた。廣いスモルニーの建物の中を、部屋から部屋へと覗きあるいた。ツエー・エー・カーの部屋には誰もなかつた。ペトログラード・ソヴィエツトの部屋も同じであつた。道々彼は私に話した。ボリシエキキは粗野な、無智な、

美的感受性のない俗人であると。彼は如何にも標本的な、ロシアのインテリゲンチヤであつた。我々は遂に第十七室、軍事革命委員の部屋に來た。出入の頻繁な其の戸の外に立つてゐると、フト一人の脊のくゞまつた顔の平たい、徽章のない軍服を着た男が目についた。其の顔は笑つてゐるやうに見えたが、實は、極度の疲労から生じた唇の緩みであつた。それはクリレンコであつた。

私の連れは瀟洒たる青年であつたが、クリレンコを見つけると、忽ち喜びの叫びを發してツツカツカと近寄つた。

『ニコライ・ワシリキツチ！』彼は手を差出した。『君は僕を覚えてますか。一緒に監獄に居た事がある。』

クリレンコは考へこんで、マジ／＼と彼れの顔を見た。『オーさうだ！』クリレンコは非常に懐かしさうな態度で、彼を見あげ見おろしながら云つた。『君はS君だつたね。随分しばらくだつた。』二人はキツスした。

『君は一體こゝで何をしてた？』『ナーニ、見物してたのさ。君達は大成功だね。』さうだ、………
………クリレンコは笑ひながら言ひ添へた。『だけど、だけど、——今に又監獄で會ふかも知れんよ。』

私の連れはクロボトキンの學徒であつた。彼に云はせると、此の革命は大失敗であつた。此の革命は民衆の愛國心を喚起してゐなかつた。勿論それは、人民の革命に對する用意が足りなかつた事を立證するものであつた。

X X X X X X X

八時四十分、雷のやうな拍手の響きが委員の出席を知らせた。レーニン——大レーニンも其の中に在つた。丈の低いズングリした體格で、大きな頭が肩の上にシツカリと据わり、額は禿け、胴は丸々とふくらんでゐる。小さい目、平べつたい鼻、廣い大きな口、タツブリした顎、いつもは短かい髭が一面にのびだしてゐるが、今日は綺麗に剃つてゐる。上衣は皺くちやで、ズボンは少し長す

ぎる。歴史上に比較のないほど敬愛される、モツブの偶像としては、如何にも非印象的である。單純に理智の力を以つて民衆を指導する、一種不思議な指導者である。色彩もなく、愛嬌もなく、非妥協的で、分離的で、少しも畫題的な特點特質がない。只、深遠な思想を單純な言葉で説明し、具體的の形勢を明晰に分解する力がある。そして俊敏の才氣に兼ねて最大な智力的圖太さを持つてゐる。……

先づカメネフが軍事革命委員會の行動を報告した。軍隊に於ける死刑の廢止、宣傳の自由、權利の復舊、政治犯を以て捕縛された士官及び兵士の釋放、ケレンスキー捕縛の命令、及び私有倉庫に於ける食糧の沒收。……大喝采。

それから反對諸黨派の殘黨から微弱な氣焰が少しばかり擧げられた後、いよくレーニンが立ちあがつた。彼は演壇の端をつかんで、其の小さい目をしばたきながら、ズット一わたり群衆を見まはし、拍手のやむのを待つてゐた。漸く群衆が靜まると、彼は飾りけもなく斯う云つた。「我々は

之から社會主義制度の建設に向つて進むのである。」大喝采、大拍手が更に満場に漲り起つた。

彼は第一に無併合、無賠償、及び人民自決權を基礎とする講和を説き、秘密條密の公開と破棄とを説き、續いて交戦各國の人民に告げる宣言案を朗讀した。

彼が大きな口を開いて語る時には、恰も笑ふやうに見える。彼れの聲は暖がれてゐるが、不愉快ではない。多年の演説の結果として、さういふ風に堅まつたものと聞かれる。話し方は單調だが、その代りいつまでも續く。力を籠める時には只だ少し前に俯向く。身振は少しもない。それで一千の素朴な顔が切實な崇敬を以て彼を見あげてゐる。

レーニンは結末に於いて斯う云つた。「十一月六七日の革命は實に社會革命の時代を開いた。……我が勞働運動は、平和と社會主義との名に於いて勝利を占め、能く其の運命を成就するであらう。」是等の言葉の中に、どこか知らん落ちついた力強い所があつて、それが人の心を動かすのであつた。それから各派各團體の代表が、入れ代り入れ代り、十五分間づゝの演説をやつた後、十時三十五

分、カメネフが採決すると、満場一致で可決した。只一人、反対の手を挙げかけた者があつたが、周囲の人々に怒鳴りつけられて、コソ／＼と引込めた。

其の時、自然の共通の衝動から、皆が起立して『インタナシヨナル』の歌を合唱した。一人の白髪の老兵士は子供のやうに嘔り泣をしてゐた。壇上の（唯一の婦人たる）アレキサンドラ・コロンタイも涙をうしろに拭ひすてた。『戦争がやんだ！戦争がやんだ！』と、一人の若い労働者は嬉しうな顔をして、私の直ぐそばで叫んでゐた。すると誰か後ろの方から『タワリーシユ！自由の爲に死んだ人々を、今こゝで記念しようぢやないか！』そこで、今度は『弔ひの曲』が歌はれた。その緩やかな、物悲しい、それでゐて勝ちほこるやうな調子のある所が、如何にもロシア人の特質であつた。思へば數千人、數萬人が、牢獄に、追放に、シベリヤの鑛山に、死んだのであつた。革命は彼等が期待した通りに來なかつた。インテリゲンチヤが望んだ通りに來なかつた。けれども、それは遂に來た。粗野な、剛健な、性急な、現實的な形式を以て、センチメンタリズムを踏みにじつ

て來た。

×

×

×

×

×

×

次にレーニンは土地法案を読みあげた。其の第一條に曰く。

『總ての土地私有は無賠償を以て即時廢止せらる。』

（其の時、農民議員の中から、前大臣のサラズキン及マズロフを釋放する要求が提出された。トロツキーは起立して、軍事革命委員が、昨日既に、マズロフ、サラズキン、グヴオズトフ、マリヤントキッチの四人を釋放する事を決定した旨を報告した。）

それから一時休憩の後、午後二時、土地法が農民議員大歡呼の中に可決された。

午後二時三十分、カメネフが憲法案を朗讀した。『憲法議會の開會まで、勞農假政府を組織し、それを『人民委員會』と稱する。……』

群衆は沈黙してゐたが、『人民委員』の姓名を読みあげると、その一人毎に大喝采が起つた。レー

所が、まだ二つの有力な反対演説者が現はれた。一つはゴルキーの『新生命』の記者アヴィロフ。彼は此の場所に不似合な、氣の利いたフロックコートを着た、聰明な顔付の青年であつた。『假政府が倒れたのは左翼デモクラシーの力ではない。只、彼等が平和とパンとを人民に與へ得なかつたからである。』『然るに諸君は、其パンを人民は與へ得るか。穀物は缺乏してゐる。農民の多数は諸君に味方せぬであらう。諸君は彼等に農具を與へ得ないではないか。薪炭その他の日用品を得る事は目下殆んど不可能ではないか。』『平和は一層困難である。聯合諸國は諸君の提議を受けつけぬであらう。諸君はロンドン、パリ、若しくはベルリンに於いて承認されぬであらう。』『我等は今聞いた。聯合國の諸大使は引揚げつゝある。ボリシエキキに反対する「革命救済委員會」は全國の到る處に組織されつゝある。』『如何なる一黨派も是等の大困難を征服する事は出来ない。社會主義聯合政府

を支持する、人民の大多数のみが、よく此の革命を成就し得るものである。』

さしもの群集も、アヴィロフの此の冷靜な論理に動かされないわけに行かなかつた。初は盛んに妨害を試みたが、最後には多少の拍手すらあつた。

次はカレニン。これは最後までボリシエキキと行動を共にした、左翼社會革命黨（有名な女丈夫マリヤ・スピリドノヴァの一派）に屬する勇敢な青年で、其の誠實は何人も疑ふ者がなかつた。彼は論じて曰く、『我黨はボリシエキキと他のデモクラシー諸團體との仲介者を以て任じてゐる。それが目下に於ける我黨の主要な任務である。我々は社會主義聯合政府以外の、如何なる政府をも支持する事が出来ない。』『ペトログラード市會は既に諸君と戦ふべく、強大な「革命救済委員會」を組織しつゝある。諸君は既に孤立してゐる。』

そこでトロツキーが登壇した。彼は確信ある皮肉を以てそれに答へた。『我々の孤立を非難するのは今に始まつた事ではない。一舉以前、殆んど總ての黨派が我々に反対してゐた。然るに我々が殆

んど流血を見ずして政府を仆し得たのは何故であるか。事實が、我々の孤立してゐない事を、最も明白に證明してゐるではないか。彼等は聯合は必要を説く。然し此の際に於いて可能なる唯一の聯合は、即ち労働者と兵士と最貧農民との聯合である。』若し夫れ平和の問題については、こゝに只だ二つの道がある。ロシア革命が全歐洲に革命運動を作り出だすか、それとも歐洲諸強國がロシア革命を亡ぼすかである。』

群集は之で再び革命に對する自信を得たものゝ如く喝采した。然しまた一つの敵が現はれた。それは鐵道従業員組合の代表であつた。彼は十分の敵意を含んで爆彈を議場に投げた。『ロシアに於ける最も強大な労働團體の名に於いて、予は發言を要求する。予は諸君に告げる。我々の執行委員は斷々乎としてポリシエキキを支持する事を拒絶する。今日の中央權力たる者は、革命的デモクラシーの有らゆる正當の團體に對して責任を有する社會主義的、及び革命的權力であらねばならぬ。さういふ權力の確立するまで、鐵道従業員組合は、反革命軍隊をトベログラードに輸送する事を拒絶

すると同時に、又組合本部の承認を経ざる如何なる命令の執行をも禁止する者である。』

彼れの演説の最後は殆んど聞取れないほどの嘲罵を蒙つた。然し實際、これは大打撃であつた。壇上の委員連の顔にもアリ／＼とそれが讀まれてゐた。

然しそれにも係はらず、憲法案と、人民委員の指名とは、大々多數を以て可決された。次いで全露ソヴイエット大會のチエー・エー・カー（即ち中央執行委員會、即ち又、ロシア共和國の新議會）の選舉が行はれた。トロツキーが其の結果を讀みあげた。全員一百名、内ポリシエキキ七十名。農民及び脱退諸黨派に對しては、猶ほ他に空席が保留されてゐた。『我々は、我々のプログラムを採用する、有らゆる諸黨派を政府に歓迎する者である。』トロツキーは此の言葉を以て報告を終つた。斯くて第二回全露ソヴイエット大會は解散された。そして議員等は、此の重大事件の詳細を全露國の四隅にまで傳達すべく、それ／＼の故郷に急いだ。

大正十一年十一月十五日印刷

定價壹圓三十錢

一休和尚

著者印



著者

堺利彦

發行者

東京市日本橋區檜物町九番地
西村辰五郎

印刷者

東京市小石川區久堅町百八番地
土谷清隆

發行所

東京市日本橋區檜物町
電話本局一八七一番

東雲堂書店

振替東京五六一四番

東雲堂書店發行書目

堺利彦著	自由社會の男女關係	定價五拾錢	送料四錢
堺利彦著	社會主義綱要	近刊	
荒畑寒村著	光を掲げるもの	近刊	
馬場孤蝶著	社會的近代文藝	定價五拾錢	送料四錢
大杉榮著	勞働運動の哲學	發賣禁止	
上司小劍著	金魚のうろこ	定價五拾錢	送料四錢
石川啄木著	我等の一團と彼	定價五拾錢	送料四錢
荒畑寒村著	逃避者	定價五拾錢	送料四錢
西村陽吉著	新社會への藝術	定價貳圓五拾錢	送料十二錢

佐藤牧山著	老子講義	定價貳圓	送料拾貳錢
白柳秀湖著	藤十郎と富藏	定價壹圓五拾錢	送料八錢
宮島資夫著	國定忠次	定價壹圓三拾錢	送料八錢
沖野岩三郎著	英傑サウル	定價壹圓三拾錢	送料八錢
石川啄木著	啄木歌集	定價壹圓	送料八錢
石川啄木著	啄木遺稿	定價壹圓五拾錢	送料拾貳錢
國木田獨步著	獨步詩集	定價九拾錢	送料六錢
北原白秋著	思ひ出	定價貳圓	送料拾錢
北原白秋著	桐の花	定價貳圓	送料拾錢
三木露風著	露風集	定價壹圓八拾錢	送料拾錢

Handwritten text in a decorative square stamp, possibly containing a date or signature.

Faint, illegible markings or text in the center of the left page.

終

